令和４年度 政経学部奨学論文

論題

イタリアと黒死病―ミラノに着目して

法律政治学科 3 年　佐藤 裕太
経済学科　3 年　野本 駿介
法律政治学科 3 年　渡辺 才華

要約

本稿の目的は、「黒死病」と称される1340年代のペスト流行について、イタリア北部の都市ミラノを事例に、感染封じ込めに成功した可能性とその要因を政治支配の側面から考察することである。

14世紀イタリアでは人口減少に伴う社会経済の衰退があり、1437年から黒死病が流行した。その死者数は、近年、従来考えられてきたよりもさらに多かった可能性が指摘される。そんな中、ミラノでは感染拡大を抑え込んだ可能性が指摘されてきた。

この問題をめぐっては、伝統的なペスト封じ込め成功説が人々の心性を表す史料を客観的な死亡者数と混同して使用してきたが、近年はそれへの懐疑説も出ている。本稿では、研究史を一次史料から検証した上で、ミラノ君主ルキノ・ヴィスコンティに焦点を当てて検討した。結果として、秩序を重んじた政治や強い権力を行使した人物だったことから、ルキノのパーソナリティがミラノでの黒死病感染拡大を防止する鍵となった可能性が示された。